

国東紀行

仏の里めぐり (其の二)

浜田平士

(会員・米水津村宮野浦)

少々冷たく感じた十一月十九日の早朝、米水津歴史を知る会十二人と、佐伯史談会五人の一行十七人は、昨年に続き今年も西国東の仏の里めぐりに出発しました。米水津も佐伯の人達も二度目の事にて顔馴染みです。車中では自己紹介などしながら談笑のうち、二時間半で熊野の里に着きました。

日豊本線の車中からも望まれる奇妙な山容は鋸山と云い、その山ふところに胎蔵寺、熊野磨崖仏、熊野権現社が鎮座しております。一行は約三百メートルの山道を登ることにしました。上の方は乱積み石の石段です。百段のうち終わりの一石を担いで逃げた鬼が、一夜で築いたとの伝説ですが、楽々と登れるものではありません。ふうふう息をはずませながら八合目位まで登ると、左方の絶壁から

巨大な仏が見下ろしています。有名な熊野磨崖仏です。大日如来は約七尺、不動明王は約八尺、共に半身像にて圧倒される大きさ乍ら、素朴な穏やかな親しみの湧く石仏です。如来像の頭上に刻まれている三枚の種子曼陀羅は、傷みもひどくよく判りませんが、たいへん珍しいものとの事です。藤原時代末期の昔、これ程の立派なものが造られたのも、信仰によって多数の修験者や石工が集まって出来たものだろうが、とても強大な力を感じました。

熊野権現社は、石段を登りつめた所です。十二世紀の初め頃、紀州熊野権現の強い影響力により、鎮守の神と



熊野磨崖仏

して祀ったものでしょう。鬼の石段は下山するのにも大変でした。

胎藏寺には立派な仁王が立っています。文久三年（一八六三）日出の石工、一宮正行の銘が刻まれています。

また、宝物館には県指定の文化財「懸仏」三面があります。銅円板は御神鏡であり、如意輪観音、阿弥陀三尊、阿弥陀が取り付けられており、「六郷本山今熊野御正体也」として尊崇されています。鎌倉中期と室町時代の作です。ここからは正面の山頂に洞窟が見えました。その昔修験者がこもった所であるとの事です。なお、ここは遠来の参詣者が多い所でもありました。

真木大堂は、六郷満山六十五ヶ寺の本山本寺として栄えた馬城山伝乗寺のことです。奈良時代の養老年間に、宇佐八幡の化身仁聞菩薩が開基して、飛驒の匠の建立と伝えられます。往時この辺り田染盆地には、伝乗寺三十六坊の伽藍が建ち、天台宗の教典法華経を学ぶ僧達が満ち満ちていましたが、約七百年前焼失し衰亡しました。現存する九体の仏像は、村人達の厚い信仰によって大堂に集められ、守り続けられて今日に至っています。昔の大堂は茅葺屋根で、その葺き替えは十年に一度、村人総

出の行事でありました。収蔵庫に入って大変驚きました。

・阿弥陀如来像

上中下生、結跏趺座、螺髮、高さ約二・二メートルの坐像は藤原時代作の木造、慈悲の顔は端正で重量感に満ちています。

・四天王像

持国天、增長天、広目天、多聞天は、邪鬼を踏まえて本尊仏の四方を守っている高さ約一・六メートルの立像、藤原時代作の木造で、恐い顔乍ら剽軽な感じ。

・大威徳明王像

六面六臂六足、大忿怒相、白牛に跨がる高さ約一・三メートルの木造で藤原時代作、大きき日本一。

白牛は、富貴寺大堂に使用した榎の木の残材を運んで真木まで来たが、動かなくなった牛であるとの伝説です。牛の顔は印象的でした。

・不動明王と二童子立像

調伏の相、青不動、高さ二・三五メートルの木造で大きき日本一、藤原時代作の雄大莊嚴な尊容です。

脇仏二童子はこんがら童子とせいたか童子高さ約一、三メートル、聞き馴れない名前ですが、均整がとれ見飽きない。

以上九尊像とも国の重要文化財です。また、寺院周辺には多くの石造文化財を集めて、古代公園として整備しています。

次は富貴寺に向かいました。

大堂は簡素でどっしりとした落ち着きがあり、四隅に伸びる屋根の曲線は微妙優美、平安時代後期樫の太木で建てたと言い、九州最古の建築物です。内部も至って簡潔な造作です。御本尊は薄暗い内陣にお座りしており、壁画はどうか判る程度です。創建当時の美しさはどのようなであったのか、当時の人々は極楽浄土を想像した事でしょうか。境内は一面に銀杏の落葉で蔽われています。

此の大堂も兵乱により度々被害を蒙ったが、村人は力を合わせて修復し、今は国宝に指定され、私たちはその崇高な姿に接することが出来ます。周辺の石造物は県指定の文化財も多く、十分楽しませてくれます。

次は長安寺へ参詣しました。

この寺も平安朝以来の天台宗古刹で、六郷満山の総山として栄えました。本堂は最近修復され、収蔵庫には寺宝の太郎天像、せいたか童子、こんがら童子が祀られており、何れも平安朝末期作の木像です。また、法華経を刻んだ銅板経十九枚と銅宮四枚がありますがすべて国の重要文化財です。

境内には二対の仁王像や国東塔等石造文化財も多く、裏の屋山は古戦場で山城跡も残り、古い歴史を伝えています。

ここにも鎮守の神として、六所権現宮が祀られ境内は銀杏の落葉で覆われ、一面黄色い絨毯を敷き詰めた感じでした。

やがてバスは山を下り、天念寺と川中不動に向かいました。

ここも平安・鎌倉時代から修験場として栄え、創建以来の仏像は本尊の阿弥陀如来を始め、釈迦、勢至、日光、月光、吉祥の五仏とも国宝でしたが、洪水と災害のため消滅し、今は五仏だけが県指定文化財です。西国東で修正鬼会の行事が催されるのはこの寺で、火祭りの大松明が二本、隣接の講堂に並べられていました。また、こ

こも鎮守の神として六所権現社を祀っています。

寺院の前を流れる川の真ん中には、大きな岩が突き出ています。岩の一面には不動明王と二童子が刻まれており、素朴な親しみもわく珍しい光景です。

対岸から眺める裏山は奇岩秀峰の素晴らしい景観ですが、山頂には岩窟や絶壁に懸かっているめがね橋も見えます。今でも続いている峰入り修行の僧達が、必死で荒行に励んだ場所でしょう。

天念寺をあとにして溪谷を下り、豊後高田市内に近い割掛遺跡を見学しました。そこには弥生時代と同じ茅葺きで立穴式住居が復元されていました。こうして十九日の日程は終わり、真玉町温泉センターに到着したのは四時半頃でした。

二日目は午前八時の出発です。当日は高宮会長が依頼していた、真玉町の文化財調査委員をしておられる桑原清氏が説明のため同行してくれました。八十四歳という高齢でしたが、かくしやく矍鑠たるご様子です。バスは真玉の谷を上って応暦寺に着きました。

本尊は不動明王ですが、堂内には入らず、境内の石造仏を見学しました。山門の両脇には仁王像が立ち、境内



應暦寺の宝篋印塔(右)
と隠切支丹五輪塔(左)

の一隅に大きな地藏尊があります。地元の名石工と云われ、はさまよう法橋の位を持っていたという安藤国恒の元治元年(一八六四)の作です。隠れキリシタンの五輪塔にも注目しましたが、十字架の刻みはよく判りませんでした。

次の無動寺は県道のすぐ上でした。裏山の絶壁は二百メートル位はあるとか、目を見張る険しさです。本尊仏は不動明王で藤原時代の秀作です。激しい怒りの中にも柔和さを感じる表情です。他に薬師如来や十二神将等、県や町指定の文化財の多い寺でした。

本堂裏には十六羅漢、十大弟子、板碑、宝篋印塔が並ぶ石仏公園があります。

次は岩仲寺に寄りました。隣に山神社が鎮守の神として祀られています。登り口に立つ宝篋印塔は永正二年（一五〇五）と刻字されており、鳥居も古い物のようでした。バスは香々地町に向かつて溪谷を上り、夷谷に出ました。ここ夷谷公園からの眺望は耶馬溪に勝るとも劣らぬ景観です。夷谷では六所神社、実相院、霊仙寺と続いて参詣しました。

六所神社は六郷満山の諸寺院同様、宇佐八幡宮の神仏混交の影響で、寺院の鎮守の神として隣接し祀られています。建武三年（一一三六）足利尊氏が戦勝祈願し、その記念に六本の杉を植えたといえられていました。近年まで社前に聳えていたのですが、老木のたぬ姿を消し切り株の一部が保存されています。実相院では巨大な国東塔が目をひきます。総高約四尺鎌倉時代末期の作。傍らに地藏が大小二体並んで祀られて



霊仙寺の石地藏

います。

霊仙寺は古刹の風格を残しています。永い歴史の中では幾多の戦乱に会い、厳しい法難をしのいで来たのでしよう。石段を上り山門をくぐると、ここかしこに石造諸仏が並んでいます。中でも九州一という石地藏は基壇からの高さが十尺、仁王像は阿形に板井国良、吽形に板井国政の銘があります。この三寺社は一体不離の關係で、

共に数多くの石造品が祀られているのも、この地域に法橋位の名石工板井一族が住んでいたからでしょう。

夷谷を下って長小野の里を訪ねました。真玉またま統寛むねひろ主従の終焉の地です。天正十八年（一五九〇）、反逆の刃に斃

れた真玉一族を弔う五輪の墓約七十基が、草叢の中に苔むしていました。桑原清氏を始め、篤志の方々が建立した追悼の碑があります。

バスは更に谷を下り、真玉町粟島神社に到着しました。断崖の岬の先端には朱塗りの社が鎮座しています。紀州加太粟島神社の分霊で、我が村小浦の粟島神社は、下津の分霊ですから元宮は別ですが、縁結びの神として崇められています。

豊前海に臨む波穏やかな海岸には、大松の並木が立ち、調和した美しい景観が望めます。昼食のあとバスは真玉町中心部に向かいました。

真玉氏の居館跡は町の中心部に近い所でした。文和元年（一二三二）より天正十八年（一五九〇）まで二百三十八年間、此の地に豪族として勢力を揮ったのであろうか、今も水濠をめぐらした面影を残しており、県指定史跡です。

真玉寺は、江戸時代末期に此の居館跡地に移されたと言われ、十六羅漢の並ぶ古堂と一対の仁王、真玉寺石殿、卯塔は注目に値しました。

そこへ程近い所に旧真玉寺跡があります。今も残る観音堂の周辺には古墓群があり、伝説の河童の池もありました。真玉氏の墓地は五輪塔群でしたが、強者どもが夢の跡を偲び感慨一入でした。そのあと温泉センターに立ち寄り、桑原氏に謝辞を述べてお別れしました。

研修を終わって感じたことは、一日目の大きな磨崖仏、仏像、大堂壁画等さすが国宝や重文の貫禄というのでしょうか、圧倒される感じでした。

二日目の仏像、石仏、国東塔等数多くの石造物は、国

東の山野に根ざした素朴さと親しさを感じました。

六郷満山の呼び名のとおり、これ程多く広い信仰の集団が形成されたものかと、ただ驚くばかりです。宇佐八幡宮の強大な力があつたとは言え、永い歴史の中では興亡変遷があつて今日に至つたわけで、それを支えた経済力とひたむきな庶民の信仰はどんな事であつたのかと思つたり、仏像を見る目ももう少しでもあつたらと残念に思つたりの二日間の旅でした。



実相院の国東塔